

【大宮盆栽村100周年に向けた研究ノート】 ①盆栽村が生まれた地

大宮盆栽村は令和7年(2025)に開村100周年を迎えます。今号から定期的に「盆栽村100周年に向けた研究ノート」を掲載する予定です。1回目は、盆栽村が開拓されたのはどのような場所であったのか、土地の歴史について振り返ってみたいと思います。

団子坂(文京区)の清大園をはじめとした都内の盆栽園が、急激な都市化による環境悪化や関東大震災での被災を契機に集団移転し、大正14年(1925)に誕生したのが「大宮盆栽村」です。移転先に選ばれたのは、当時の埼玉県北足立郡大砂土村(現さいたま市北区)でした。大砂土村は、明治22年(1889)の町村制施行により、7村が合併して発足した村で、盆栽村となる土地は、土呂村と本郷村という2つの旧村の地内にまたがっています。本郷村には村の南側に江戸時代の新田開発によって生まれた大きな飛地(定慶新田)があり、この飛地の

大部分と土呂村の西側一画に盆栽村が開拓されたこととなります。大正15年(1926)9月に発行された『大砂土村盆栽村附近明細図』(さいたま市立博物館蔵)を見ると、「かえて通り」と名付けられた盆栽村のメインストリートが「大字土呂」と「大字西本郷」の「大字境」となっており、かつての村界に当たるよう

です。さて、盆栽村開拓以前の1帯は「源太郎山」と呼ばれていました。実際に山地であったわけではなく、台地上に広がるこんもりとした森林地帯をこの名で呼んでいたようです。『土地台帳』を確認すると、明治期には該当地域の大半の地目が「山林」と記載され、さらに、明治13年(1880)~1886(1886)に測図された『迅速測図』を見ると、森林の主要樹種として「松」と表記され、主に松林(武蔵野の植生からすると赤松林)であったことがうかがえます。

このあたりは、土呂村や本郷村の村人が分割して所有する私有林となっていました。かつては薪炭などの燃料や肥料・飼料などの採集地として大切に管理されてきた、いわゆる「里山」の森でしたが、急速な近代化の流れのなかで有用性を失い、次第に荒れて行っただけです。『大宮盆栽村 五十年のあゆみ』(大宮盆栽組合/1973年刊)には、「土地は持っているも地租がかかるばかり、酒一升つけてやらねば貰い手がない、ということと、一升土地」といわれていた。」とあり、地主が持て余すような状況になっていたとみられます。

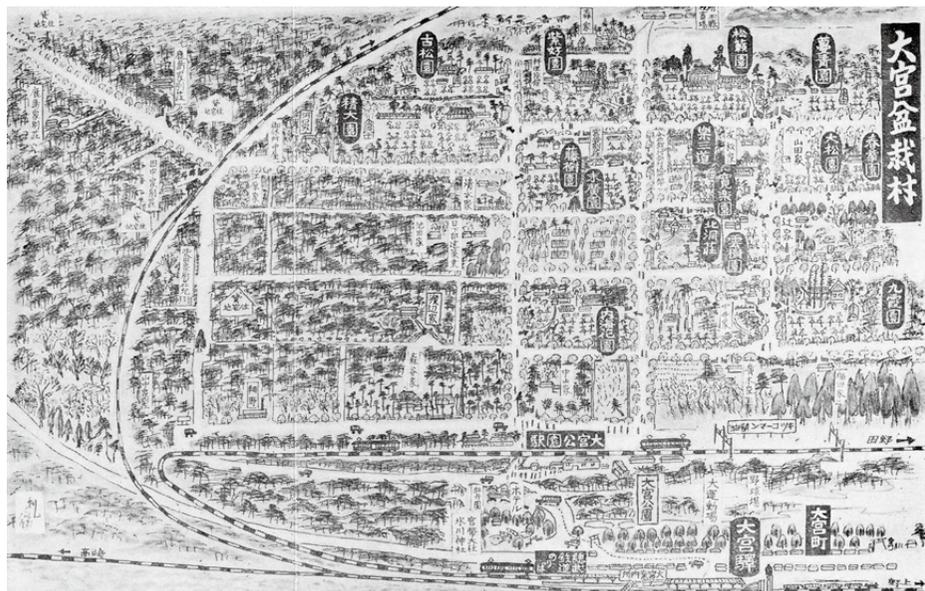
また、現在は交通の便が良い大宮盆栽村ですが、当時の事情は全く異なっていました。現在の東武鉄道に当たる北総鉄道の路線は、『明細図』が発行された大正15年の時点では大砂土村内で線路が途絶え、また延線工事中でした。

大宮と春日部間の開通と大宮公園駅の開業は、北総鉄道が総武鉄道に改称される昭和4年(1929)11月を待たねばなりません。さらに、線路が村を貫通する国鉄東北本線(現JR宇都宮線)の土呂駅

(1983年開業)もまだ存在しません。村の開拓当時は、大宮駅から徒歩か、大砂土村内を南北に走る県道(市原線)の乗り合いバスが唯一の交通手段であったのです。辺鄙な立地の森林に道を造成し、

盆栽園の広々とした圃場として切り開くのですから、その苦労は並大抵のものではなかったようです。

ところで、移住の候補地は神奈川や千葉にもあったようですが、森林開墾の労を押ししても、この地に定まった理由は何でしょうか。関東ローム層の赤土と水質が良く、盆栽培養に適した環境であること、観光名所であった氷川神社と氷川公園に近く、北総鉄道の敷設計画といった将来性が見込める立地であること、そして、移住する側の盆栽園と、受け入れる側の村民の利害関係が一致し、1万坪以上に渡る広大な土地を賃借する算段が付いたことなどが大きな要因となったのではないのでしょうか。土地の借用に当たっては、大砂土村の村長や衆議院議員を務めた地元の有力者・小島善作が仲介役を務めたことが知られています。清水利太郎(清大園)と小島善作の賃借契約書も残っていますので、次回は村の具体的な開発の様子を眺めてみましょう。



「大宮名所盆栽村」盆栽村組合発行(表面部分) 昭和10年(1935)頃
この頃は、村の西半分は赤松林の景観がよく残されている

大宮盆栽村に関する資料をお持ちの方がいらっしゃいましたら、当館まで連絡を頂けると幸いです。古い写真や地図、宅地販売の広告、盆栽村にあった盆栽園のパンフレットなどを探しています。

さいたま市大宮盆栽美術館

電話：048-780-2091 (代表) / FAX：048-668-2323

※次回の研究ノートは12月号の予定です。
(当館主査 菅原千華)